九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

象徴詞の「と」脱落についての通時的考察

川瀬, 卓
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/8917

出版情報：語文研究. 100/101, pp.16-29, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

象徴詞の「と」脱落についての通時的考察

川　瀬　　卓

要　旨

現代語のABAB型象徴詞(注1)において、語尾に接続する「と」は任意なものであるが、歴史的に見るともともと必須なものであったことが知られている。本稿では、噺本を資料として象徴詞の副詞における「と」脱落の過程について論じた。調査結果から「と」脱落は近世後期に一般化したと考えられる。さらに、副詞として用いられる場合と「する」によって動詞化された場合とで「と」の脱落を比較すると、両者において「と」の脱落過程に明らかな差が見られ、その差が「する」の結合性によって生じたものであることを主張した。また、「する」によって動詞化された場合、「と」を伴う「ABABとする」の分布に偏りが見られることを指摘した。

1．はじめに

現代語では、ABAB型象徴詞を副詞として用いる場合、語尾に接続する「と」は任意であると考えられる。

(1)　a．湖がきらきらと輝いている。

　　b．湖がきらきら輝いている。

しかし、歴史的に見ると、象徴詞を副詞として用いる場合に「と」はもともと必須であったということが知られている(注2)。象徴詞の「と」脱落に関して触れられている論考として、鈴木（1984)、柳田（1972)、来田（1973)、佐々木(1973）などがあげられる(注3)。

柳田（1972）では、

> 抄物について見ると、そのような例（筆者注：「と」を伴わない例のこと）は既に漢書抄や史記抄に若干見え、文明期頃までのぼる。(中略）少し下った天文期の惟高妙安の詩学大成抄と玉塵抄とになると、それぞれ10語以上の例が認められ、この頃既に一般化していることが知られる。

と述べられている。来田（1973）においては、「史記桃源抄の擬声擬態の副詞語彙100語のうち、次の３語を除いて、すべて「ト」を伴っている」と述べら

れている。また、狂言資料を例に「と」の脱落の問題を口語性として捉えている。

柳田は天文期に一般化していると述べているが、この点に関しては、少し注意しなければならない。「「と」の脱落が起こりうる」ということは言えるが、まだ「と」を伴うものが基本だったと考えられるからである。つまり、「と」を伴わないものが広く行われたというわけではなく、その意味で「と」の脱落が一般化されたとは言えない。後で述べるが、「と」の脱落がある程度一般化されたと言ってよい時代はもう少し下がると考えられる。

また、佐々木 (1973) による次のような指摘もある。

> 虎明本にあっては、「と」を欠くものは稀で、僅少の例の大部分が限られた用法である。しかも、反復形にのみこれが現われる点が、注目に値する。(中略)
>
> ○副詞用法で「と」を欠くものは、同じ大蔵流でも、時代の下がる虎寛本になると増加する。)

本稿では、これらの先行研究を踏まえ、近世期の噺本を資料として「と」の脱落現象を通時的にみていくことにする。

その際、「と」の脱落に関して副詞の場合と「する」による動詞の場合を区別してみていくと、それらの様相は異なるものとなることがうかがえる。「ABAB と」と「ABAB」、「ABAB とする」と「ABAB する」とを比較すると「と」の脱落に差が見られるのである。「と」の脱落そのものについては今までも指摘されてきたが、管見の限り、副詞として連用修飾する場合と、「する」によって動詞化された場合との差に着目して、歴史的に考察したものはない。

本稿では、まず、現代語をもとに「する」の性質を考察し、そのことと「と」脱落の関係について述べたあと、象徴詞の副詞における「と」脱落について通時的な考察を行う。(注4) その後、副詞の場合と「する」によって動詞化された場合とで「と」脱落の様相を比較し、両者の性質の違いを述べる。また、「ABAB φする」が一般化されたと考えられる近世後期において、「ABAB とする」の分布に偏りが見られることを指摘する。

2.「する」の性質

近世における「と」脱落の様相をみる前に、現代語における象徴詞副詞と象徴詞が「する」によって動詞化されたものについて触れておく。結論を先に述べるなら、これらは結合性の差から区別するほうがよいと考える。例えば、

「彼はにやにや笑っている。」でも「にやにや彼は笑っている。」でも適格であるのに対し、「彼はにやにやしている。」は適格であるが、「にやにや彼はしている。」は不適格と考えられるからである。

(2) a．彼はにやにや笑っている
　　b．彼はにやにやしている
　　c．にやにや彼は笑っている
　　d．*にやにや彼はしている（作例）

また、このことは次のように動詞句において「する」であるか、その他の動詞かで差がみられることとも関係すると考えられる。次の例は、副詞的修飾成分として働くか補足成分として働くかの違いがある例である。中北（1993）では次のような例をあげて、結合性の差について述べている。

(3) a．豆を甘く煮る
　　b．豆を甘くする
　　c．甘く豆を煮る
　　d．*甘く豆をする（中北（1993）の用例）

これらの例はどれも語ではなく、統語的な句のレベルであると考えられる。(注5) しかし、その結合性に注目して考えると、「する」は象徴詞を動詞にする場合においても、補足成分として項をとる場合においても、その他の動詞に比べて上接するものとの結合性が強いといえる。

以上述べたような性質は、象徴詞の副詞「ABAB（と）」と「する」によって動詞化された「ABAB（と）する」の「と」脱落に量的な差が見られるという点にもあらわれていると考えられる。近世期に、象徴詞の「する」による動詞化は「と」を伴うところから直接結びついていくようになる。それに対し、副詞として用いられる場合は「する」に比べて「と」が落ちにくいのである。(注6)

このことと関係するものとして、柳田（1972）で、以下のような指摘がある。

> 擬声擬態語を受ける動詞が「スル」の場合、「～トスル」の情態性のものから、「～スル」の動作性のものへと転じることが可能であるから、その他の動詞の場合よりもトが落ちやすいように考えられる。そして現代語においても、スルの場合にはトが付かぬ方が一般的で、その他の動詞の場合にはトが付くと付かないとの両形が用いられるという傾向があるように思われる。しかし、今のところ、抄物に見える、40例ばかりのトの付かない例については、特に「～スル」の場合に例が多いという片寄りは認められない。

抄物の結果からは、「する」の場合と他の動詞との間で「と」が付くか付かないかの差はないと述べている。また、「とする」から「する」へと変化していく時期の実際の調査を行ったわけではないようであるが、「する」の方は「と」が落ちやすいのではないかという推測と、現代語においては「する」の方が「と」が落ちやすく、その他の動詞は「と」が落ちる場合と落ちない場合の両方が使われるという推測をしている。(注7)

抄物では差異が見られないとされているのに対し、「する」の発達した近世後期においては明らかな差が見られる。このことは、象徴詞を受ける動詞が「する」であるときは他の動詞とは違い、結合性を高めていっていることを示していると考えられる。

３．近世に見られる副詞「ABAB(と)」の「と」脱落の様相

２.で、副詞として使われる場合と「する」による動詞との場合で象徴詞とそれを受ける動詞の結合性が違い、それが「と」脱落の差として現われているのではないかということを述べた。ここでは、「と」脱落における差がどのように生じていったかについてみる前に、副詞において「と」の脱落現象がどのようになっているかをみていく。柳田（1972）や来田（1973)、佐々木（1973)を見てもわかるように、中世においては「一般的」と呼べるほど「と」の脱落が起きていたわけではない。そこで、「と」の脱落が一般化していく過程について、噺本を資料として見ていくことにする。(注8) まず、近世前期の様相を見たあと、近世後期の様相を上方と江戸で分けて考察していく。

３．１．近世前期の様相

初期の噺本においては、象徴詞の副詞自体の用例が少ないということもあるが、その割合を見ても「と」のついたものが多く、「と」の脱落はあまり見られない。第一巻から第三巻まで（1672頃まで）で見られる「と」が脱落した例を全て示す。

(4) a．そろ〳〵寺にかへるに、それハなんぞ。　(醒睡笑1623)

b．大児、あれほとの餅をかゝへて、そろ〳〵くハゝおもしろからふのとさゝやきける時、　(醒睡笑1623)

c．葉をとそよ〳〵荻の上風といふ句に、ませ垣の内には人の米かみてと出したり。　(醒睡笑1623)

d．さて、夜あけてハひとめもつゝましなといふて、こそ〳〵みなかへ

る。　(昨日は今日の物語1615–1644頃)

e．有人にはかに、くすしを心かけ、いしよどもをあつめ、そろ〳〵よミて、　(わらいくさ1656)

f．そろ〳〵さぐりける所へ、まだらのねこきたる。(わらいくさ1656)

g．ふめは、ゆら〳〵うごきわたり、奈落の底までもおちいるべき心地して、沼のごとくになりたり。　(かなめいし1661–1672頃)

h．五人三人とりつきて、あなたへハむら〳〵、こなたへハむら〳〵と、をしかへしをしもどし、　(一休諸国物語1672)

第一巻から第三巻までのABAB型象徴詞118例中８例が「と」の脱落した例なので、脱落率は約6.8%である。脱落の見られた語としては、「そろそろ」「そよそよ」「こそこそ」「ゆらゆら」「むらむら」の５語であった。「そろそろ」は現代語で「もうそろそろ出発しようか」というような時に使う「そろそろ」ではなく、動きの様子が静かであるさまと解釈してとった。ただし、(4) c は韻律の関係での脱落という可能性が高く、(4) h は対比的な言い方であり、特殊な例となる。それらを除外するとさらに例は減る。

続いて第四巻から第六巻まで（1677〜1704）を見てみると、若干「と」の脱落したものが増えてく(注9)る。いくつか例を示す。

(5) a．つにむせてさめたる目を、する〳〵おきあがりたれば、　(秋の夜の友1677)

b．ゆる〳〵お入被成よとて中をミれば、どろのやうなる湯に、　(当世軽口咄揃1679)

c．紫野へゆき、和尚の御目にかゝり、ぐど〳〵かたりけるハ　(杉楊子1680)

d．さらバとて湯を涌し、そろ〳〵垢を洗落しけれバ、　(囃物語1680)

e．十二三に成むすこ、とば〳〵来て、こたつへ足をふんごミ、おやぢの足をじかとふむ。　(露新軽口はなし1698)

第四巻から第六巻までの184例中、「と」の脱落したものは27例であった。したがって第四巻から第六巻までの「と」の脱落率は約14.7%となっている。以上のことから、1600年代においては「と」をともなっている例がほとんどであり、後半になると「と」の脱落が若干増えてくるといえる。

さらに、1700年代に入ると「と」の脱落はだいぶ増えてくる。

(6) a．目鏡をあてゝ物の本見ていられたが、とろ〳〵ねいり、後にハゐびきをかゝれた。　(軽口あられ酒1705)

b．たゝミのあわい、ゑんのしたへ、ころ〳〵こけおち、
(軽口はなしとり1727)

c．むすこハこらへかね、くし〳〵なき出せバ、しやうこともなし。
(軽口若夷1742)

d．扨鱠をミれバ、大こんざく〳〵切たばかりで、 (口合恵宝袋1755)

e．母親、今夜は二かいのはしご、余りぎし〳〵なるゆへ、ふしんに思ひ、 (軽口片頬笑1770)

近世前期について「と」のついたものと、「と」の脱落したものの用例数を表にまとめなおすと＜表１＞のようになる。φ率というのは、「と」の脱落した例の全用例に対する割合である。

＜表１＞

年代	巻	ABAB と	ABABφ	計	φ率
～1671	第１～３巻	110	8	118	6.8%
1677～1704	第４～６巻	157	27	184	14.7%
～1733	第７巻	45	19	64	29.7%
～1770	第８巻	53	21	74	28.4%

＜表１＞を見てもわかるように、1600年代には20%に満たないほどの脱落率であるが、1700年代に入ると「と」の脱落率はおよそ30%となっている。異なり語数で見ても、第七巻においては41語中14語「と」の脱落したものがあり（34.1%)、第八巻においては45語中17語「と」の脱落する語が見られた（37.8%)。

「と」の脱落例として特に目立つのは「そろそろ」であった。初期から見られ、また「そろそろと」よりも「そろそろ」で使われることが多い。意義としても動作が静かな様子から、ものごとが少しずつ進んでいくさまを表している例などがあり、解釈によっては現代語の「もうそろそろ」というように取れるものもある。

以上、近世前期の「と」脱落について見てきた。近世前期において次第に「と」の脱落が増えていく様子がうかがえる。しかし、「と」の脱落率からすると、まだ「と」を伴うほうが基本であると考えられる。次に近世後期の様相を見ていきたい。

３．２．近世後期の様相

近世後期は江戸が文化の中心となり、江戸での作品が多くなってくる。一方、

上方の資料も江戸ほどではないものの出版はされ続ける。ここでは、『噺本大系』の中から上方語資料と江戸語資料を分けて調査し、その様相を見ることにする。近世前期においては「と」を伴うのが基本であったが、後期に入ると「と」の脱落がだいぶ一般化したことが観察される。

まず、上方語資料と江戸語資料にわけていくつか用例を示す。さらに、調査をまとめたものを表として掲げる。上方語資料によるものが＜表２＞で、江戸語資料によるものが＜表３＞である。上方語資料の表は、第九巻から第十一巻まで資料数にかなりばらつきがあったため、まとめて示した。

＜上方＞

(7) a．サア一ツ眠まどろみ給へといひけれバ、客、大きに悦び、やがて枕して寐入しが、何やら、ボシヤ〳〵寐言をいふ。(夕涼新話集1776)

b．親父、こりやたまらぬと血のたら〳〵ながるゝあたまをかゝへ、(時勢話大全1777)

c．浅瀬にうぼ〳〵ういてあれバ、(滑稽即興噺1794)

d．大せいのこのは天ぐの羽風にて、ざわ〳〵かしましきゆへ、(臍の宿かえ1812)

e．悪女ハやう〳〵心つき、あたりきよろ〳〵見廻す所を、(落噺顋懸鎖1826)

f．コレ、うだ〳〵いはずと、はやくおりなされトいはれて、(落噺千里薮1846)

＜江戸＞

(8) a．今迄グス〳〵暮したかハり、チトきほふて見よふと、(仕形噺1773)

b．お茶の水からだら〳〵おりて、四つ谷へ出、赤坂の方へ行と、(万の宝1780)

＜表２＞上方

年代	巻	ABAB と	ABABφ	計	φ率
1772～1781	第９～11巻	38	34	72	47.2%
～1795	第12巻	25	30	55	54.5%
～1801	第13巻	35	23	58	39.7%
～1812	第14巻	23	11	34	32.4%
～1829	第15巻	18	9	27	33.3%
～1885	第16巻	13	13	26	50%

＜表３＞江戸

年代	巻	ABAB と	ABABφ	計	φ率
1772・1773	第９巻	46	41	87	47.1%
～1776	第10巻	17	15	32	46.9%
～1781	第11巻	43	46	89	51.7%
～1795	第12巻	40	21	61	34.4%
～1801	第13巻	18	22	40	55%
～1812	第14巻	30	21	51	41.2%
～1829	第15巻	22	16	38	42.1%
～1885	第16巻	24	26	50	52%

ｃ．わけをはなし給へと、ひそへきけハ、　(珍学問1803)
ｄ．仙沢、身ハがたへふるへだし、　(落噺屠蘇喜言1824)
ｅ．ぬすびと、抜身にてづかへそばへ行キ、　(はなしの種1839)
ｆ．やがてかの木へのぼり、棒をもちたゝくと、柿がごろへおちる。
(落しばなし1850)

1700年代前半では「と」の脱落が30%程度であったのに比べ、1700年代後半には脱落率が高い場合、50%前後になっており、大局的に見れば、上方においても江戸においても「と」の脱落はかなり一般化したものといえよう。上方語と江戸語で比較してみると、若干江戸語の方が「と」の脱落率が高くみえるものの、「と」の脱落に差があるかどうかをはっきり言うことは難しい。「と」の脱落がどのような環境で起きるのか、あるいは意味的な制約があるかどうかなどについて明らかにする必要があるが、今はまだその用意がない。

また、作品によっても脱落の多いものから少ないものまでばらつきがあった。例えば、江戸語資料として第九巻に収められている近目貫（1773）は８例すべて、仕形噺（1773）は15例中10例が「と」の脱落した例であった。上方語資料においても滑稽即興噺（1794）では、14例中11例が「と」の脱落したものであった。このように作品によっては、かなり「と」の脱落が多く起こっているものがあり、各作品の持つ性格についても考慮する必要がある。

以上のように近世前期においても「と」の脱落は起こりえたが、一般化したといえるほどになったのは近世後期に入ってからということになる。この段階で「と」は任意なものになったといえるだろう。この流れは近代、現代につながっていくものと考えられる。

４．副詞「ABAB（と)」と動詞「ABAB（と）する」の比較

これまで、副詞として用いられる場合について「と」脱落の様相を見て、近世をとおして「と」が任意なものになっていくことを確認した。次に副詞「ABAB（と)」と動詞「ABAB（と）する」を比較して見ていきたい。近世前期についてまとめたものが＜表４＞である。括弧の中の数字は「と」の脱落率を示している。(注10)

＜表４＞

年代	巻	ABAB とする	ABABφする	ABAB と	ABABφ
～1671	第１巻	1	0（0)	24	3（11.1)
1623・1667	第２巻	4	0（0)	15	3（16.7)
1668～1672	第３巻	7	2（22.2)	71	2（2.7)
1677～1698	第４巻	7	1（12.5)	64	8（11.1)
1678～1688	第５巻	7	3（30.0)	49	11（18.3)
1688～1704	第６巻	7	1（12.5)	44	8（15.4)
～1733	第７巻	6	7（53.8)	45	19（29.7)
～1770	第８巻	4	10（71.4)	53	21（28.4)

1600年代は「と」の脱落する例が見られるものの、副詞の場合も動詞の場合も「と」を伴うことが基本であったようである。副詞と動詞の間には特に差は見られない。しかし、1700年代に入ると「する」のほうは「と」を伴わないで直接ついた例のほうが多くなるのに対し、副詞のほうは「と」の脱落率が30%程度にとどまっている。「する」はもともと、副詞を動詞化するものであるから、「と」が必須の状態である場合には、「とする」のように「と」を伴った形で接続する。しかし、「と」の脱落がある程度行われるようになった段階で、「する」のほうは直接象徴詞に働きかけて「と」の脱落を促したと考えられる。

次に、近世後期についてみていく。上方語資料によるものを＜表５＞、江戸語資料によるものを＜表６＞として分けて掲げる。

「する」の場合「と」の脱落率がかなり高く80%、90%までになるのに対し、副詞の場合は30%から50%の脱落率である。「と」が必須なものから任意なものになっても、副詞として用いる場合には「と」の付くほうが多い。副詞は「と」を伴わずに、それだけで独立性を持つようになったが、「と」の脱落は任意なものになったところでとどまった。一方、「する」は直前の象徴詞との結

びつきを強くしていき、「と」の脱落に大きく働きかけ、「と」を伴わないことが一般的になったと考えられる。つまり、動詞「ABAB（と）する」における「と」の脱落は単に副詞の助詞が落ちていくという傾向によるものではなく、「する」の要請によるものということがいえる。

＜表５＞上方

年代	巻	ABAB とする	ABABφする	ABAB と	ABABφ
1772～1781	第９～11巻	5	7（58.3）	38	34（47.2）
～1795	第12巻	1	8（88.9）	25	30（54.5）
～1801	第13巻	2	4（66.7）	35	23（39.7）
～1812	第14巻	4	3（42.9）	23	11（32.4）
～1829	第15巻	1	6（85.7）	18	9（33.3）
～1885	第16巻	0	3（100）	13	13（50.0）

＜表６＞江戸

年代	巻	ABAB とする	ABABφする	ABAB と	ABABφ
1772・1773	第９巻	3	7（70.0）	46	41（47.1）
～1776	第10巻	3	4（57.1）	17	15（46.9）
～1781	第11巻	3	13（81.3）	43	46（51.7）
～1795	第12巻	5	5（50.0）	40	21（34.4）
～1801	第13巻	0	12（100）	18	22（55.0）
～1812	第14巻	2	10（83.3）	30	21（41.2）
～1829	第15巻	1	11（91.7）	22	16（42.1）
～1885	第16巻	1	18（94.7）	24	26（52.0）

５.「ABAB とする」における分布の偏り

最後に「する」によって動詞化されたものにおける分布の偏りについて指摘しておきたい。「ABABφする」は「している」や「する」、禁止など制限なくさまざまな形で述語として使われる。一方、「と」を伴った「ABAB とする」は「としている」や「とした」という形をとって文を終止することもあるが、以下のように「として」の形で用いられることがきわめて多いのである。特に近世後期においてその偏りは顕著である。

＜上方＞

(9) a．一向にわけもなく、ふなへとして駕蒲団の上へ居ハり、
(時勢話綱目1777)

b．当時川東にて名高き女郎、とかくぶらへとして病がちなりけれハ、
(新話違なし1797)

c．利休下駄はちよりへとして氷上にひゞき、裸参りの鈴の音は北風にさけんでちりりんたる、 (新撰勧進話1802)

＜江戸＞

(10) a．此男、しほへとして、イヤ、あまり仕合でも御座りませぬ。
(はつ鰹1781)

b．うろたへてきよろへとして、近所を見ていれバ、 (拍子幕1792)

c．道ばたにのたれふして、少しとろへとして、おきて見れバ、日もくれて、 (百生瓢1813)

「として」の形をとるものをのぞいて、近世後期における「ABAB とする」の用例を表にまとめなおすと、＜表７＞のようになる。

＜表７＞

年代	巻	上方	江戸
1772～1781	第９～11巻	2	3
～1795	第12巻	0	2
～1801	第13巻	0	0
～1812	第14巻	2	1
～1829	第15巻	0	0
～1885	第16巻	0	1

＜表７＞を見てもわかるように、「として」の形をとるものを除くと「と」を伴う「ABAB とする」の用例はほとんどない。先ほどの＜表５＞＜表６＞はこの「ABAB とする」が「として」の形をとるものを入れた上での脱落率を示したものなので、「ABAB とする」の「として」への偏りを考慮すると、実際は「ABABφする」で用いることのほうが、より一般的であったといえる。

「ABAB とする」のこの偏りは「と」の持つ性質によるものと考えたい。現代語においては、「ABABφする」が「ABAB とする」になった場合不自然に

なることがあるが、そのことと、噺本における分布の偏りは何らかの関係があると考えられる。また、書き言葉的か話し言葉的かという文体の問題との関わりも考えられる。さらなる考察が必要であるが、詳しくは別の機会に譲りたい。

６．まとめ

本稿では、「と」の脱落という現象に焦点を当てて、象徴詞の副詞における「と」脱落の通時的考察を行い、さらに副詞として連用修飾する場合と動詞「する」によって動詞化された場合との差について述べてきた。これまでは、「する」と他の動詞を区別せずに、単に「と」の脱落が見られ、近現代では「と」無しが多くなってくると述べられてきただけであった。しかし、現代語で考えると「する」と他の動詞では性質に差があると考えられる。近世をとおして通時的にみても、「と」の脱落現象からその性質の違いを見てとることができる。象徴詞を受ける動詞が「する」であるときは他の動詞とは違い、結合性を高めていくのである。

「と」脱落に関して述べてきた流れをまとめると次のようになる。

①副詞 ABAB と、動詞 ABAB とする
　ともに「と」が必須である。(「する」との結びつきもあまり強くない)

②副詞 ABAB（と)、動詞 ABAB（と）する
　「と」が必須なものではなくなる。(まだ「と」を伴うほうが普通)

③副詞 ABAB（と)、動詞 ABAB（と）する
　「と」は任意になってきているが、副詞の場合は「と」を伴うほうが基本、「する」の場合はφが基本となる。

④副詞 ABAB（と)、動詞 ABABφする
　「する」はほとんど「φする」。副詞 ABAB においても「と」を伴わないことが多くなってくる。

今回、『噺本大系』の第一巻から第十六巻に収められている噺本を資料として、上方語と江戸語をわけて「と」の脱落について見た。しかし、今回の考察では、上方語と江戸語で差があるのか、あるいはないのかということに関して、はっきりした答えを見つけることが出来なかった。今後、洒落本、人情本、滑稽本など広く資料を集め、検討する必要がある。また、「と」の脱落についても、口語性の問題といった脱落の要因や「とする」と「する」の構文的な現れ方の意味するところなど、考えるべき問題がある。今後の課題としたい。

注

(注１)　擬声語・擬態語は典型的なものは区別できるが、判断の難しいものも多くある。本稿では、それらを一括して象徴詞の名称を用いることにする。

(注２)　鈴木（1984）では、副詞として用いられる場合、「する」によって動詞化する場合のどちらにおいても、中世頃から「と」の付かない例が見られ、近世、近代、現代においては「と」が付かないことが多くなったと述べられている。

(注３)　また、田守／スコウラップ（1999）では、反復形における「と」の脱落について次のような指摘がある。

第２　助詞との共起の違い

反復形のオノマトペは様態副詞的に機能する場合、「と」を伴っても伴わなくてもよいが、一般語彙の漢語の場合「と」を義務的に伴うし、和語の場合「と」を伴った方が好ましいと思われる。

(22)　ａ．ころころ{φ/と}転がる　　きらきら{φ/と}光る
　　ｂ．煌々{*φ/と}輝く　　炎々{*φ/と}燃える
　　ｃ．赤々{??φ/と}燃える　　青々{??φ/と}茂る　(p.30)

現代語による考察をもとに、同じ反復形でも象徴詞と一般語彙の相違点として、助詞の脱落について違いが見られることを指摘している。今回は象徴詞を扱うので反復形におけるこれらの違いは扱わないが、今後考察していく必要があるだろう。

(注４)　象徴詞の「と」の脱落は、ＡンＢリ、ＡッＢリなどでも見られるが、多くの時代を通じて多く使われている型で最も代表的な ABAB のものを考察の対象とする（Ｂは促音以外の音)。「する」による動詞化も「ABAB（と）する」のみを考察の対象とする。

(注５)　影山（1993）の例から、「ABAB する」は統語的な動詞化であると考えられる。

ａ．頭がズキズキする。
　　頭はズキズキ，心臓はドキドキした。(影山1993.p.261)

(注６)　参考までに近世末の江戸語資料である春告鳥（1836）の調査結果を示すと、別表のようになる。(日本古典文学全集によった)

＜別表＞

	ABAB とする	ABABφする	ABAB と	ABABφ
用例数	5	16	25	15

(注７)　柳田（1972）の「「～トスル」の情態性のものから、「～スル」の動作性のものへと転じることが可能であるから」という説明は、後で述べる「とする」の分布の偏りとも関係するか。

(注８)　武藤禎夫・岡雅彦編『噺本大系』第一巻～第八巻　東京堂出版
武藤禎夫編『噺本大系』第九巻～第二十巻　東京堂出版
今回は第一巻から第十六巻までを対象とした。第一巻から第八巻までを近世前期、第九巻以降を近世後期とする。
用例の採集基準は以下のとおりである。
・ABAB のもののみをとる。(「さらりさらりと」などはとらない)
・副詞として動詞にかかっているもののみをとる

(「たばこすぱすぱ。」のように述語としてはたらいているものはとらない)
・「ABAB に」はとらない（ぼろぼろになる）
・複合名詞はとらない（ぶらぶら病、にこにこわらひなど）
・漢語由来と考えられるものはとらない
しんしんと（深々）、うつうつと（鬱々）、ぼうぼうと（茫々）ゆうゆうと（悠々と）、さつさつと（颯々と）など
・また、象徴詞的と考えられるが、連濁をおこす以下のような例は除く
しみじみと、ほのぼのと、さめざめと、など
・赤々と、青々となどのような形容詞の意味を強く感じられるようなものは除く
おおよそ以上のような基準で用例を採取したが、象徴詞は多くの先行研究で認められているように、主観的な部分が入らざるを得ない。その点で問題が残る。

(注９) 江戸語の資料として考えられる鹿野武左衛門口伝はなし、鹿の巻筆の用例は除いた。

(注10) 「ABAB とする」と「ABABφする」については川瀬（2005）のデータを若干修正したものである。

参考文献

影山太郎（1993）『文法と語形成』 ひつじ書房
来田　隆（1973）「史記桃源抄の副詞語彙について」『国文学攷』 61
佐々木峻（1973）「大蔵流狂言虎明本における擬声擬態の副詞」『国文学攷』 61
鈴木雅子（1973）「擬声語・擬態語一覧」『品詞別日本文法講座』 10明治書院
鈴木雅子（1984）「擬声語・擬音語・擬態語」『研究資料日本文法④修飾句・独立句編』 明治書院
田守育啓／ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペ－形態と意味－』（くろしお出版）
中北美千子（1991）「擬音語・擬態語と形式動詞「する」の結合について」『国文目白』31
中北美千子（1993）「形容詞・形容動詞と形式動詞「する」の結合について」『国文目白』32
西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』 明治書院
蜂矢真郷（1998）『国語重複語の語構成論的研究』 塙書房
前島年子（1967）「時代を通して見た擬声語・擬態語」『東京女子大学日本文学』 28
森重　敏（1959）『日本文法通論』 風間書房
森田雅子（1953）「語音結合の型より見た擬音語・擬容語－その歴史的推移について－」『国語と国文学』 30－1
宮地　裕（1978）「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』 115
柳田征司（1972）「抄物に見える擬声擬態の副詞」『愛媛大学教育学部紀要』 4－1
山口仲美（1984）『平安文学の文体の研究』 明治書院
川瀬　卓（2005）「象徴詞を動詞化する形式の変遷」『語文研究』 99

（かわせ　すぐる・本学大学院博士後期課程）